

日原憲之

## 赤い冬

詩人の仕草に慄いた夜、  
脳みその回遊に尻尾が折れる

天気予報が雪だとしても  
言葉のリズムにあやかりたい

右足のくるぶし辺りに脈の虫  
悪くない人生だった

涙の粒の長い不在に  
冬は足りてますか？  
と、小さなつむじ風が  
薬指の先の微かな温にそっと尋ねている